

2022年2月20日・佐土原教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書4章1～20節

説教題：「聞く耳のある者は聞きなさい」

先日、郵便局に行きました。駐車場には、車が10台近く駐車出来ますが、その日は一杯でした。ようやく1台が出て、私は停めることが出来ました。郵便局で用事を済ませて駐車場に帰ってみたら、やっぱり駐車場は一杯でした。それでもまだ入って来る車があります。私が車に乗り込むと、1台の車が私の車に近づいて来ました。明らかに私が出て行くのを待っておられる様子でした。私はその時、「この人のために早く出て上げよう、どうぞ、どうぞ」とは思わなかったのです。そう思う時もありますが、その時は、せっかく苦勞して確保した駐車スペースを出て行くのが何か惜しいような、一瞬ですが、少しじらして上げたいような、そんな気持ちがスーッと過ったのです。後になって自分でもビックリというか、ガッカリしました。心根が曲がっていると言うか、どこまで行っても罪人だな、と思わされました。こんな者を、神様は良く愛して下さるな、と改めて感謝したことです。だからこそ、日々、悔い改めが必要だと思いました。そうでないと、罪の積み残しが溜まってしまいます。

さて、聖書の学びに入りましょう。「新改訳」の小さい聖書は、この箇所を3つの部分に分けて、それぞれ小見出しを付けています。「1～9節：『種が蒔かれた地面のたとえ』」、「10～12節：『たとえで話す理由』」、「13～20節：『種が蒔かれた地面のたとえの説明』」。その分け方、小見出しに従ってお話しをしたいと思いますが、「1～9節」、「13～20節」が中心になります。

1：種が蒔かれた地面の譬えと説明①…薦め

4種類の土地は『神の言葉』という種を蒔かれた人の心の状態を表しているとイエスは言われます。同じ御言葉を聞いても、受け止める心の状態によって結果は違って来るのです。だからそれは「私の心はどんな状態にあるのか」、そのことを吟味するように、という薦めでもあります。

聖書の舞台であるパレスチナでは、土地を耕す前に種を蒔いて、蒔いてから土地を耕したそうです。種は4種類の土地に落ちました。①ある種は「道ばた(畦道)」に落ちました。畦道は踏み固められていますから、種から出た根が土の中に入って行きません。土の方が種を受け付けません。そうしているうちに、悪い者が来て奪って行くのです。それは閉ざされた心の状態を表現しているかも知れません。閉ざされた心には、御言葉は入って行くことが出来ないのです。人の心を閉ざしてしまうものは、何でしょうか。私は、ある時、ある方と信仰について話し合う機会がありました。信仰を持って欲しいと思ってお話ししたのですが、その方は「必要を感じない」と言われました。もちろん、信仰がなくても生きて行けます。しかし、先週もお話ししたのですが、「デイリーブレッド」に人種差別の話がありました。「メキシコ系アメリカ人のお母さんと黒人のお父さんの間に生まれた子供に対して、アイスクリーム屋の店員さんが冷たい態度を取った、その家族に声を掛けなかった」という記事でした。しかしお母さんは、そこで「恨みがましくなりませんように」と祈るのです。私はその記事を読んだ瞬間、全ての人がイエス様によって心砕かれ、教えられ、遜ることを学ばなければ、こういう問題はなくなれないと思いました。私達は、人種差別のような問題に直面することはないかも知れませんが、人の底意地の悪さで辛い、嫌な思いをすることがあります。私は、どんなに素晴らしい人でも、人は皆イエス様を必要としていると思います。また「人生には自分の力ではどうにもならないことがある」という経験を、私達は持っているのではないのでしょうか。その意味でも神が必要ですし、究極的に、人は誰も死んで行きます。森繁昇さんが「君は死んで行く。用意は出来ているか」という歌を歌っていますが、死に向かう私達は皆、神を必要としない人はいないと思います。しかし、心を閉ざしていたら、せっかくイエス様のことを聞いても、心に入って行かない、消えてしまうのです。

②ある種は「土の薄い岩地—(石だらけで土の少ない所)」に落ちました。薄い土の層でも、根は出ます。しかし深く根を張ることが出来ませんから、日照りが続けばすぐに枯れてしまうのです。「神との関係が、結局表面的なものに過ぎなかった」ということでしょうか。

③ある種は「いばらの中」に落ちます。この地方では雑草を根から抜くということをしないうです。表面の草を刈り取っても土の中には根が残っていますから、すぐに雑草が成長して種の成長を阻みます。「優先順位の間違った信仰生活」でしょう。あるいは、思い煩いや誘惑の中で「神の言葉によって生きてなんかいられない。現実の生活があるのだ。その方が重大だ」と思う心かも知れない。

しかし、④ある種は「良い地」に落ちます。その人は「みことばを聞いて受け入れた」(20)。その種は育て「30倍、60倍、100倍の実を結んだ」というのです。そして、もちろんイエスは、この譬を聞く人達に『御言葉を聞いて悟る良い地』になるように、そのようにしてこの現実の中で—(天の国に備えて)—豊かな実を結ぶように」と言っておられるのです。では、「良い地」になるためには、何が大切なのでしょうか。

その前に、イエス様はどうして神を説くのに、キリスト教信仰を説くのに、御言葉の種を蒔く人の譬えを語られたのでしょうか。それは聖書に「あなたがたが新しく生まれたのは…朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わる事のない、神のことばによるのです」(1ペテロ 1:23)とあるように、私達が神を経験するのも、多くの場合、神の言葉によるからです。FEBC放送でアルコール依存症に苦しんだクリスチャンのお証を印象深く聞いたことがあります。この方は、家族も失いました。自分の人生が崩れて行くのが分かりました。「これじゃいけない」と思って助けを求めたのです。そんな時に聖書の言葉を聞くのです。「ペテロは彼にこう言った。『アイネア。イエス・キリストがあなたをいやして下さるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい』。すると彼はただちに立ち上がった」(使徒 9:32)。彼は、「この御言葉は自分に語られている」と思いました。そして「癒された」と感じたのです。それから立ち上がって、台所にあった一升瓶を全部割って捨てました。そして本当に癒されるのです。神の言葉には、それを受け入れるなら、心の中でエネルギーを発電するような力があります、神の力で生きて行けるのです。だからイエス様は、神の言葉を受け入れ、御言葉を通して神と繋がり、神を経験する、そのような信仰を望まれたのです。

しかし、ここでイエスが譬えておられる4つの土地—(4つの心の状態)—は、全て神の御言葉に触れました。しかし最初の3つは、正しく受け入れなかったのです。4番目の土地と前の3つの土地との一番の違いは何でしょうか。12節に『聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です(12)とあります。これは旧約の「イザヤ書」からの引用です。神は、民がイザヤの言葉を聞いて、悔い改めてイザヤの言葉を受け入れることを願っておられました。しかし、民が悔い改めないことも知っておられました。だから「お前が私の言葉を語れば語るほど、まるでお前の語る言葉によって、民の心が頑なにされているように見えるぞ、そういう状況に直面するぞ」と言われた言葉でした。しかしイザヤは、「私もそうでした。でもあなたは、そんな私を悔い改めに導いて下さいました。だから私は出て行きます」と言って出て行きました。イエスは「私の人々に語っても、語っても、分かってもらえない、しかし悔い改めて神の赦しを受け取って欲しいのだ、だから『譬え』を使って語るのだ」と言っておられるのだと思います。ポイントは「悔い改めること」です。「悔い改め」はどこから来るのかと言うと、罪の自覚から来るのです。

以前、イラン人で、日本で牧師をしている人の話を聞きました。彼はイランで生まれました。家庭環境が辛かったのです。父親とは0歳の時に死に別れ、母親は、毎日違う男の人を家に連れ込むような状態でした。それで、いたたまれなくなって10歳で家を飛び出しました。そして道路や橋の下で、同じような境遇の子供達とグループを組んで生活しました。喧嘩が強くなければならぬ。「どうやって相手をやっつけるか、どうやって人より得をするか、どうやって物を盗むか」、そんなことばかりの生活だったそうです。20歳の時に軍隊に取られて、イラン・イラク戦争の前線に出ました。今まで話をしていた隣の人が爆弾でバラバラになる、そんな生活でした。そこで1人のアルメニア人移民のクリスチャンに出会うのです。そのクリスチャンは、軍隊の給食係でした。イラン人の青年は、どうやって人のものを盗むか、そういう生き方でしたが、そのクリスチャンは、給食の配膳を本当に誠実にやるのです。自分の分まで人に分け与えようとするのです。イラン人青年は、彼に聞いたのです。

「どうしてあなたは、そんなことが出来るのですか」。クリスチャンは言いました。「僕が良い人間だからではない。僕の中にイエス様が生きているのだ」。青年はキリスト教に興味を持ちました。しかし、散々悪いことをして来ています。イスラム教徒でしたから、「神」という概念はある。しかし「よほど努力をして、色々なことをしなければ、神に近づくことは出来ない、神は自分を受け入れてくれない」と思っていました。ところが聖書を読んで行くと、キリスト教の神は「赦す神」だと書いてあるのです。過去を赦す。罪を赦す。イエス様が十字架で語られた言葉も「赦し」の言葉でした。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)。イエス様の教えは、徹底して「神が赦して下さる」ということでした。彼は、自分の過去を赦されたいと思いました。そして祈るのです。私の過去を赦して下さい。その時、彼の心の中に響く言葉がありました。「しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」(マタイ 9:2)。その時、彼の中に過去の重荷を赦された喜びがやって来るのです。そして、彼は神との交わりを持って生きるようになるのです。罪を自覚した時に、それを赦されたいと願う時に、神に詫びる時に、それが私達を神に近づけるのです。それが私達の心を「良い地」にするのです。

聖書は「義人はいない。ひとりもない」(ローマ 3:10)と語ります。先日の報告の時、兄弟が「人は罪を犯さずには生きて行けない」と証しして下さいました。重い言葉だと感じながら伺いました。人間には原罪があるからです。しかし、そこが神との接点です。私達に罪があるからイエスが十字架に架かられたのです。だから私達は、十字架を喜べるのです。

いずれにしても、私達が自らの罪を自覚すること、悔い改めること、それが私達の心を耕された「良い地」にするのではないのでしょうか。この譬えの勧め、それは、私達が悔い改めること、悔い改め続けることです。それが私達を、豊かな実りを結ぶ「良い地」として、生かすのです。

2：種が蒔かれた地面の譬えと説明②…励まし

この箇所は、私達に「悔い改め」を勧めるだけではなく、励ましも与えてくれます。私達が「良い土地」になるなら、祝福にも与ることが出来るということです。

この人は、大事な種を一生懸命に蒔くのですが、しかし4分の3は成長しない、種を蒔いたことは無駄だったと思われるような状況があるわけです。失敗に失敗を重ねるのです。しかし、失敗に失敗を重ねるようなこの農夫の蒔いた種が、しっかり根を下ろせる所も確かにあったのです。そして、その時、その種は、30倍、60倍、そして100倍の実を結んで行くのです。「励まし」というのはここです。イエス様は言われます。「あなた方が私を選んだのではない。私があなた方を選んだ。あなた方が出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、私の名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、私があなた方を任命したのである」(ヨハネ 15:16)。私達が信仰生活を整え、「悔い改め」の柔らかい心を持って、神の赦しを感謝しつつ生きて行く時、私達も「実を結ぶ」ことが出来るのです。それは自分の力ではない、神がそうさせて下さるのです。

「実」とは何でしょうか。信仰の結ぶ実には色々な形があるでしょう。イエス様は、私達が「命」を豊かに持つためにおいで下さいました。「ガラテヤ書5章」には「御霊の実」のリストがあります。「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラテヤ 5:22~23)。私達も、主に在って、様々な「人生の実」と言えるようなものを結ばせて頂けるのです。あるいは、ある神学者は言いました。「どうぞ祈りの中で幻を見て下さい。大きな神の業を期待して下さい。『神様、どうぞ私は今、こういう状況にあります、あなたのお役に立ちとうございます。私を祝福して下さい。私の事業を、商売を祝福して下さい。私の健康を与えて下さい。私により職業を与えて下さい』と…恐れ感ないで求めなさいと神はおっしゃいます」(小林和夫)。そういう実を実らせて頂けるかも知れません。

しかし、同じように教会に期待されている「実」は、神を信じる「新しい命」を生み出し、共に育って行くことではないのでしょうか。そのようにして「御国建設」に貢献して行くことではないのでしょうか。ある教派の指導者が言ったそうです。「我々は、伝道しないで会議ばかりして来た。また自分

達が恵まれることばかりを考えて来た。そして振り返った時、後について来る人々がいなかった」。教会が生きるということは、「福音を生き、福音を伝える」ということです。伝道はまた、一人ひとりの信仰生活の命です。イエス様が復活された朝、女の弟子達に天使は言いました。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と」(マルコ 16:7)。ある先生はこう解説しています。「ガリラヤ—それは弟子達が召された地です。イエス様と共に「神の国」の福音を伝え巡り歩いた地です。『ガリラヤに行け』—それは『宣教の原点に、宣教の現場に帰りなさい。そこで君達は復活の主にお会い出来るだろう。宣教の労苦を担い続ける中で主の臨在に触れられるだろう。『神の国』の現実に触れられるだろう』ということです」(小島誠志)。私はカナダで「開拓伝道者セミナー」に何回か出席しました。そこで「教会には寿命がある」と聞きました。北米の教会の平均寿命は 60 年だそうです。なぜでしょうか。新しい命を生み出さないからです。しかし伝道は難しい。見えないものを伝えるのです。それは霊的な働き(戦い)だからです。人間的な業だけではどうにもならないのです。しかし、どんなに失敗に失敗を重ねるようなことがあっても、種が蒔かれ続ける以上は、その中の幾つかは「良い地」に落ちるのです。いや、神が「良い地」を用意しておられるのです。「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る」(詩篇 126:5-6)という御言葉があります。これは、「祈りの種を蒔く人」を譬えた言葉だそうですが、「御言葉の種を蒔く人」にも言えることでしょう。私達は、イエス様の働きに加わって行く中でイエス様に会うのです。「私には何もできない」と言わないで下さい。伝道は礼拝を抜きにしては成り立ちません。私達が礼拝を厳守し、祈りをもって主にお仕えして行くなら、主が働き出して下さるのです。いずれにしても、私達が本当に神に頼って生きる時、必ず「私達が何に生かされているのか」、それが表に出て来ます。だから、砕かれた思いで神の御言葉を受け止めつつ、「良い土地」になることを目指して、30 倍、60 倍、100 倍と豊かな実を結ばせて頂く、豊かな命を生きる、そのような信仰生活を目指しましょう。私達の思いを越えて、神が働いて下さいます。